

例、ブタもつを食した者が2例、サラダが1例あり、不明との記載が2例、輸血との記載が1例、記載のない症例が8例あった。

ク) 発生上の特徴

患者発生地は山形県、神奈川県が各3例、大阪府、岡山県、長崎県が各2例、ほか6県から各1例の発生がみられた(表17)。

4-5. エキノコックス症

ア) 年別文献数及び報告症例数

調査期間内に13件の報告文献が検索され、20症例が記載されていた。2004年に6文献、13症例、2005年に2文献、2症例、2006年に3文献、3症例、2007年には2文献、2症例の報告がなされていた(表18)。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では、70歳代が7例と最も多く、40歳代が5例、60歳代が4例、50歳代が2例、10歳代と30歳代の患者が各1例であった。症例の男女比は、6:14で女性が男性の2倍以上であった(表19)。

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴としては、腫瘍の精査が7例で最も多く、背部の鈍痛が2例あった。発熱、黄疸、肝機能障害、胆汁嘔吐、右側腹部痛、右季肋部痛、下肢の浮腫、全身の掻痒感、易疲労感などが1例ずつ記載されていた。主要症状としては、肝腫大が5例で最も多かったが、特別の異常所見を認めない症例が12例あった(表20)。

エ) 診断に要した主な検査

20例中18例は抗体検査によって診断されていた。検査法はELISA法が10例、Wester Blot法が8例であった。残る2例は生検により診断されていた(表20)。

オ) 病原体

病原体は全例が多包条虫であった。

カ) 治療、予後

記載があった15例は全て外科的処置を受けており、腫瘍を完全に摘出できなかつ

た症例では、術後にアルベンダゾールの投与を受けていた。死亡例の報告はなかった。

キ) 感染機会

酪農業を営む者が3例、漁業が1例、左官業、清掃員が各1例、井戸水、湧き水の飲用が3例、シカ生肉食が1例であった(表20)。

ク) 発生上の特徴

エキノコックス症流行地の北海道での発生が17例であったが、非流行地の東京都、青森県、群馬県での発生報告が各1件あり、青森県の症例は5歳まで北海道在住、東京都の症例は度々北海道に出張していたが、群馬県の症例は北海道への旅行歴も居住歴もなかった(表20)。

4-6. Q熱

ア) 年別文献数及び報告症例数

2004-2007年にQ熱関連の症例報告は9件検索され、17症例が記載されていた。2004年に3文献、6症例、2005年に3文献、7症例、2006年に1文献、1症例、2007年には2文献、3症例の報告があった(表21)。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では、70歳代が7例と最も多く、0-4歳と30歳代が3例、50歳代が2例、40歳代と80歳代の患者が各1例であった。症例の男女比は、9:8で男女ほぼ同数であった(表22)。

ウ) 主訴及び初診時の所見

患者の主訴は、発熱が10例で最も多く、咳嗽が5例、呼吸困難と喀痰が3例などであった。初診時の主要症状は、発熱が10例で最も多く、咳嗽、肝機能異常が各4例、肺炎3例、呼吸困難、頭痛が各2例であった(表23)。

エ) 診断に要した主な検査

検査法としては、IgM、IgG抗体が11例で、単に抗体検査と記載された症例が2例、PCR検査が2例あった。他に肝生検が1例、

胸部 CT 検査が 7 例，腹部 CT 検査が 1 例であった（表 23）。

わ) 病原体

全症例で *Coxiella burnetii* が起炎菌として記載されていた。

か) 治療，予後

記載がなかった 3 例を除き，全例で抗菌薬が投与されていた。ニューキノロン系抗菌薬が 2 例，ミノサイクリンが 6 例，クラリスロマイシンが 4 例，エリスロマイシン，アジスロマイシン，βラクタム系が各 1 例であった。

17 例中 16 例は後遺症なく回復していたが，陈旧性肺結核による換気障害を有していた 1 例は，Q 熱感染により呼吸不全が憎悪し，在宅酸素療法が必要となった。

き) 感染機会

感染源について記載された症例では，ネコが 5 例で最も多く，イヌが 3 例，ウシが 2 例，野鳥が 1 例であった。1 例ではイヌからも PCR 検査で *Coxiella* の遺伝子が証明されていた。

く) 発生上の特徴

発生地としては，宮城県が 8 例と多く，北海道が 4 例，愛知県が 2 例，奈良県，福島県，岐阜県が各 1 例であった。報告数が少ないため，宮城県で真に発生が多いか否かは判断できない（表 23）。

4-7. 日本紅斑熱

ア) 年別文献数及び報告症例数

調査期間内に日本紅斑熱の文献は 9 件検索され，症例は 12 例記載されていた。年別では，2004 年には報告がなく，2005 年に文献，6 症例，2006 年に 3 文献，4 症例，2007 年に 2 文献，2 症例の報告がなされていた（表 24）。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では，50 歳代が 5 例で最も多く，60 歳代が 3 例，70 歳代が 2 例，10

歳代と 80 歳代の患者が各 1 例であった。症例の男女比は，5：7 であった（表 25）。

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴としては，発熱，発疹・紅斑がともに 11 例と多く，倦怠感が 3 例，関節痛が 2 例，嘔吐，下肢脱力，意識障害，筋肉痛が各 1 例であった。主要症状は，発疹・紅斑が 11 例，発熱が 10 例，全身倦怠感と血小板減少症が各 3 例，関節痛が 2 例，歩行障害，食欲不振，筋肉痛，意識障害が各 1 例であった（表 26）。

エ) 診断に要した主な検査

診断に要した検査として，12 例全例で抗体検査が実施され，他に CT 検査が 2 例，超音波検査が 1 例で行われていた。

わ) 病原体

病原体として，*Rickettsia japonica* が 6 例で記載されていたが，残る 6 例では病原体の記載がなかった。

か) 治療，予後

抗菌剤として 12 例中 11 例はミノサイクリンが投与され，有効であった。残る 1 例ではミノサイクリンが無効で，シプロフロキサシンが投与されていた。DIC を合併した例では蛋白分解酵素阻害剤，ステロイド剤，ヘパリンが投与されていた。

11 例は後遺症なく回復したが，DIC を合併した 1 例は歩行障害を残した。死亡例の報告はなかった。

き) 感染機会

キャンプ地，野山，草刈りと記載された例が合計 5 例あり，残る 7 例では記載がなかった（表 26）。

く) 発生上の特徴

島根県から 3 例が報告され，徳島県，和歌山県，鹿児島県から各 2 例，長崎県，愛媛県，福井県から各 1 例が報告された。甲信越以北からの報告例はなかった（表 26）。

4-8. リステリア症

ア) 年別文献数及び報告症例数

調査期間内にリステリア症の文献は9件検索され、症例は9例記載されていた。年別では、2004年に4文献、4症例、2005年に1文献、1症例、2006年と2007年には、それぞれ2文献、2症例の報告がなされていた(表27)。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では、70歳代が4例で最も多く、0-4歳が3例、30歳代と60歳代の患者が各1例であった。症例の男女比は、7:2と男性に多かった(表28)

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴としては、発熱が7例で最も多く、下痢、痙攣、胸部不快感が各2例、胸痛、起座呼吸、意識障害、項部硬直、頭痛が各1例であった(表29)。

初診時の主要症状は、発熱が4例、項部硬直と意識障害が各2例であり、呼吸不全、起座呼吸、多呼吸、咳嗽、痙攣重積、頻脈、浮腫、胸部大動脈瘤が各1例であった。

エ) 診断に要した主な検査

9例全例で細菌培養が行われていた。内容的には、髄液培養が4件、血液培養が3件、咽頭培養と血栓培養、摘出した弁の培養が各1件であった。他に頭部CT検査が3件、胸部CT検査と心超音波検査が各2件、心カテーテル検査が1件実施されていた(表29)。

オ) 病原体

全例で *Listeria monocytogenes* が検出された。決定した診断名は、化膿性髄膜炎が4例、髄膜脳炎が1例、感染性心内膜炎が2例、菌血症とリステリア症が各1例であった(表30)。

カ) 治療、予後

全症例で抗菌薬が投与されていたが、種類はペニシリン系、セファロsporin系、ペネム系、アミノグリコシド系など様々で、多くの症例で複数の薬剤が使用されてい

た。また、1例ではステロイドパルス療法が行われ、人工換気を要した症例が2例、心血管系の手術を要した例が1例あった。7例は治癒したが、化膿性髄膜炎、髄膜脳炎と診断された70歳代の男性2例は死亡した(表30)。

キ) 感染機会

感染源、感染経路は全例で不明であった。

ク) 発生上の特徴

東京都から2例の報告があったが、その他の症例は各地方に分散しており、発生上の特徴は認められなかった。

4-9. オウム病

ア) 年別文献数及び報告症例数

調査期間内にオウム病の文献は8件検索され、症例は10例が記載されていた。年別では、2004年に3文献、4症例、2005年に2文献、2症例、2006年に1文献、1症例、2007年に、2文献、3症例の報告がなされていた(表31)。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では、50歳代が5例で最も多く、60歳代が2例、20歳代、40歳代、70歳代の患者が各1例であった。症例の男女比は、5:5で差がなかった(表32)

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴としては、発熱が6例、呼吸困難が5例と比較的多く、咳嗽が2例、食欲不振、意識障害、ショックが各1例であった。

初診時の主要症状では、発熱が7例、咳嗽が4例、呼吸困難と全身倦怠感が各3例、ショック、意識障害、チアノーゼ、頭痛、食欲不振が各1例であった(表33)。

エ) 診断に要した主な検査

胸部画像検査と抗体検査が全例で実施されていた。抗体検査は蛍光抗体法によるものが5件、補体結合反応による検査が5件であった(表34)。

オ) 病原体

蛍光抗体法により抗体検査を実施した 5 症例では、病原体を *Chlamydophila psittaci* と確定できた。

か) 治療, 予後

7 例でミノサイクリンが投与され, マクロライド系抗菌薬が 3 例で使用されていた。

10 例中 8 例は治癒したが, 70 歳代の 1 例が死亡した。また, 1 症例は転院したため最終的には転機が不明であった (表 34)。

き) 感染機会

飼育していたインコと考えられる症例が 7 例, ペットの鳥を運んだ運送業者が 1 例, 鳥飼育歴なしが 1 例, 記載なしが 1 例であった。なお, インコが感染源と考えられた 7 例中, 4 例ではインコが死亡し, 2 例ではインコは元気であった (表 34)。

く) 発生上の特徴

夫婦で同時期に発症した例が 2 件報告されていた。発生地では大阪府で 3 例, 長野県で 2 例の報告があったが, 特定の地域に集積する傾向はみられなかった。

4-10. ライム病

ア) 年別文献数及び報告症例数

調査期間内にライム病の文献は 5 件検索され, 5 症例が記載されていた。年別では, 2004 年と 2005 年にそれぞれ 2 文献, 2006 年には報告がなく, 2007 年に, 1 文献, 1 症例の報告がなされていた (表 35)。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布では, 40 歳代に 3 例, 30 歳代と 60 歳代にそれぞれ 1 例の患者発生があった。症例の男女比は, 3 : 2 であった (表 36)。

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴は, 紅斑が 3 例, 皮疹が 2 例, 痒みが 1 例であり, 初診時の主な症状は, 紅斑が 5 例, 腫脹, 硬結, 関節痛, 咬刺痕が各 1 例であった。神経症状を呈した症例はなか

った (表 37)。

エ) 診断に要した主な検査

ELISA 抗体が 2 例で, Western Blot 検査が 2 例で実施され, 他に培養, PCR 検査が各 1 例で行われ, 皮膚生検も 3 例でなされていた (表 37)。

オ) 病原体

病原体が確定できた症例は 3 例で, *Borrelia garini* が 2 例, *Borrelia afzelii* が 1 例であった (表 37)。

カ) 治療, 予後

ミノサイクリンの投与を受けた症例が 3 例, ドキシサイクリン, テトラサイクリンが各 1 例で投与され, 全例が治癒した。なお, 抗菌剤投与後に Jahrisch-Herxheimer 反応を呈した症例が 2 例あった。

キ) 感染機会

感染源は, 全例でマダニの咬刺であった。

ク) 発生上の特徴

5 例中 4 例は北海道から, 残る 1 例は岐阜県から報告されていた (表 37)。

4-11. 糞線虫症

ア) 年別文献数及び報告症例数

調査期間内に糞線虫症の文献は 11 件検索され, 11 症例が記載されていた。年別では, 2004 年と 2005 年にそれぞれ 3 文献, 3 症例, 2006 年には 4 文献, 4 症例, 2007 年に, 1 文献, 1 症例の報告がなされていた (表 35)。他に 2006 年にはブラジルで感染したと考えられる例が 1 例あったが, 輸入症例のため, 集計からは除外した。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布は, 40 歳代から 80 歳代まで発生がみられたが, 50 歳代が 7 例と最も多かった (表 38)。男女比は 7 : 4 であった。

ウ) 主訴及び初診時の所見

主訴では, 嘔吐が 3 例, 下痢と食欲不振が各 2 例, 吐血, 下血, 腹痛が各 1 例など

消化器関連のものが多く、他に呼吸困難が 2 例、血痰が 1 例、意識障害が 1 例などがあった(表 39)。

初診時の症状では、呼吸不全が 3 例、眼結膜貧血、るいそう、麻痺性イレウスが各 2 例みられた。

エ) 診断に要した主な検査

上部消化管内視鏡検査が 7 例、腹部や胸部の CT 検査が計 3 例、BAL、肺生検が各 1 例、髄膜炎を合併した例では、髄液培養、血液培養が行われており、抗利尿ホルモン不適合症候群 (SIADH) を合併した例では TSH、F-T3、F-T4、ACTH、アルドステロン、コルチゾールなどのホルモン検査がなされていた。1 例では抗糞線虫 ELISA 抗体が検査されていた(表 40)。

オ) 病原体

全例で糞線虫が確認された。

カ) 治療、予後

イベルメクチンが 6 例で、チオベンダゾールが 5 例で投与されていたが、3 例ではチオベンダゾールからイベルメクチンに変更されていた。ステロイドパルス療法を行った肺炎症例、DIC を合併した例は蛋白分解酵素阻害剤投与を受けた。十二指腸潰瘍出血のため手術を受けた症例、十二指腸からの出血をマイクロカテーテルによる動脈塞栓術にて止血した症例が各 1 例あった。

7 例は軽快したが、基礎疾患として胃癌を有し、DIC を合併した症例、白血病治療中の症例、糖尿病があり、ぶどう膜炎のためステロイド治療中の症例、計 3 例が死亡した。1 例は化膿性髄膜炎を合併して、髄膜炎の後遺症が残った(表 41)。

キ) 発生上の特徴

糞線虫症発症の要因として、11 例中 7 例は、抗 HTLV-1 抗体陽性、ステロイド治療中、糖尿病が各 3 例、白血病、胃癌が各 1 例で考えられた。

また、沖縄県出身者が 4 例、奄美大島出

身者が 1 例、他に沖縄県からの報告例が 2 例あり、大分県、福岡県の住民が各 1 例であった。

4-12. クリプトコッカス症

ア) 年別文献数及び報告症例数

調査期間内にクリプトコッカス症の文献は 58 件検索され、68 症例が記載されていた。年別では、2004 年に 24 文献、28 症例、2005 年に 16 文献、19 症例、2006 年には 8 文献、10 症例、2007 年に 10 文献、11 症例の報告がなされていた(表 42)。

イ) 患者の男女別年齢分布

患者の年齢分布は、10 歳代から 80 歳代まで分散していたが、60 歳代が 20 例と最も多く、70 歳代が 14 例でこれに次いだ(表 43)。

ウ) 基礎疾患の有無

症例の中には基礎疾患を有するものが多く、何らかの基礎疾患がある症例が 41 例、基礎疾患のない症例が 27 例であった(表 44)。肺クリプトコッカス症 38 症例では、基礎疾患がない症例が 20 例、基礎疾患を有する例が 18 例と、基礎疾患のない症例が半数以上であったが、皮膚クリプトコッカス症 10 症例では基礎疾患がない症例は 2 例で、基礎疾患がある症例が 8 例、髄膜炎及び髄膜脳炎症例 13 例中基礎疾患のない症例は 4 例であった。肺クリプトコッカスと皮膚クリプトコッカス症を合併した症例、及びクリプトコッカス性蜂窩織炎と全身性クリプトコッカス症を合併した症例が各 1 例あったため、症例の延べ数は 70 症例となっている。

エ) 主訴及び診断に要した主な検査

受診者の中には、自覚症状がなく、検診や他の疾患の経過観察中に発見された肺の異常陰影の精査を目的に受診した例が 22 例あり、中でも検診で異常を指摘された例が 15 例と多かった。訴えられた症状とし

ては、発熱が 11 例、皮膚の腫瘍などの症状が 15 例と多かったが、嘔吐、咳嗽などから意識障害、複視、難聴までさまざまな訴えがみられた(表 46)。

診断に要した検査では、肺クリプトコッカス症 37 例中、15 例で肺生検、14 例で気管支鏡検査が行われ、クリプトコッカス抗原が 8 例で検査されていた。また抗原検査は診断目的だけでなく、経過観察目的でも実施されていた。髄膜炎または髄膜脳炎の 13 例中、病理組織検査で診断された 1 例を除き、12 例で髄液検査が実施されていた。皮膚クリプトコッカス症 10 例中 9 例で、皮膚生検ないし病変部の病理組織検査が行われ、うち 7 例では生検検体ないし組織片が培養検査に供されていた。膿培養の実施は 2 例と少なかった。

わ) 病原体

起因菌は全症例で *Cryptococcus neoformans* と同定されていた。

か) 治療、予後

必要に応じて、肺区域切除術やデブリドマンなどが行われていた。投薬内容の記載がなかった例が 6 例、投薬せずに経過をみた 1 症例を除いて、抗真菌薬が投与されていた。薬剤としては、フルコナゾールが最も多く投与され、イトラコナゾールがこれに次いだ。2 剤を併用した症例もみられた(表 46)。

多くの例は、改善ないし治癒していたが、治療にも係わらず症状の改善がなかった例が 1 例、予後の記載のない例が 2 例、死亡例が 8 例報告されていた。死亡例 8 例のうち肺クリプトコッカス症、髄膜(脳)炎が各 2 例、皮膚クリプトコッカス症とクリプトコッカス性アジソン病が各 1 例であった。別の死亡例 2 例はいずれも皮膚クリプトコッカス症症例であり、皮膚病変は改善したものの、1 例は肺癌で、他の 1 例は肺炎での死亡が報告された。

キ) 感染機会

感染機会に関する記載がある報告は少なかったが、自宅の庭、隣家に鳩が群れていたとの例が 7 症例あり、うち 4 例は肺クリプトコッカス症症例であった。他にイヌ、インコ、ニワトリ飼育者が各 1 例ずついた。

ク) 発生上の特徴

地域別の症例数では、東京都が 10 例、大阪府が 7 例、愛知県、福岡県が各 5 例と多かったが、発生地は北海道と沖縄県を除く地域に分布しており、特定の地域に集積する傾向は見られなかった。

4-13. 日本脳炎、その他

a) 日本脳炎

日本脳炎の文献は 2007 年に 2 件、2004 年に 1 例あり、症例は各 1 例報告されていた。症例は、30 歳代、40 歳代、50 歳代の男性であった。主訴は発熱、頭痛、不穏状態であり、初診時の所見は、項部硬直、Kernig 徴候、意識障害などであった。40 歳代の男性は後遺症の経過報告であったため、所見は失語と右上下肢の不全麻痺であった。検査としては、血中抗体検査が全例でなされ、1 例では髄液の PCR 検査が行われ、ウイルス分離も試みられていた。40 歳代と 50 歳代の症例は脳炎を発症して後遺症が残ったが、30 歳代の症例は脳炎ではなく、無菌性髄膜炎で、後遺症なく回復した。脳炎の発生地域は島根県と石川県であった。

b) 肝蛭

2007 年に 2 文献、2 症例、2005 年に 1 文献、1 症例の報告があり、症例は 30 歳代男性、60 歳代女性、70 歳代男性であった。主訴は、好酸球増多が 2 例、上腹部痛と肝臓腫瘍の精査が 1 例であった。診断のための検査では、全例で、血中抗体検査と腹部 CT 検査がなされ、2 例では MRI 検査が、1 例では超音波検査が行われた。70 歳代の

症例では肝悪性腫瘍との鑑別のために開腹手術がなされた。全例がプラジカンテル投与を受けたが、60歳代の症例ではプラジカンテル治療が無効で、投薬を終了した後、自然治癒した。また、30歳代の症例は同薬が無効のため、未承認薬のトリクラベンダゾールにより治療して治癒した。ウシ飼育者が2例、自生のセリを食していた例が2例あった。発生地は鳥取県が2例、長崎県が1例であった。

c) ランブル鞭毛虫症

2007年と2005年にそれぞれ1文献、1症例の報告があった。2005年には輸入例1例の報告もあったが、集計からは除外した。症例は、2例とも30歳代の男性で、1例は嘔吐、下痢、心窩部痛を、他の1例は下痢、腹痛を主訴として受診した。初診時の所見は、1例は理学的に異常なく、他の1例は発熱、水様下痢を認めた。前者では上部消化管検査がなされ、後者では便培養と便塗抹検査が行われた。2例ともメトロニダゾールの投与を受けて、治癒した。2症例とも海外渡航歴はなかった。1例がステロイド治療中であった。

d) 野兎病

2005年に1文献、1症例の報告があった。症例は、60歳代の男性で、発熱と肘窩部と腋窩部の腫脹、圧痛を主訴として受診した。初診時には、肘窩部に膿瘍、腋窩部に瘻孔と硬結を認めた。病変部の組織検査、細菌培養、血中抗体検査により、診断された。腋窩リンパ節郭清術、ストレプトマイシン筋注、ミノサイクリン経口投与により治癒した。発生地は千葉県、症例は傷のある手で野ウサギを処理していた。

e) 類丹毒

2007年に1文献、1症例の報告があった。症例は30歳代の男性で、疼痛を伴う手背の紅斑を主訴に受診した。初診時にも手背に有痛性の紅斑と腫脹を認めた。皮膚生検、

生検組織の培養を行い、*Erysipelothrix rhusiopathiae*を検出した。アンピシリン投与にて治癒した。症例は素手でブタ肉を処理中に誤って手に傷を負っていた。

D. 考察

今回は文献データベースを利用して2004年から2007年に報告された動物由来感染症症例を検索し、284件の文献と343例の症例を抽出できた。今年度ではこれらの文献のうち、つつがむし病、パスツレラ症、トキソカラ症、エルシニア症、エキノкокクス症、Q熱、日本紅斑熱、リステリア症、オウム病、ライム病、糞線虫症、クリプトコッカス症、日本脳炎、肝蛭、ジアルジア症、野兎病、類丹毒の症例報告について本文を検討し、重複して報告された症例を除外し、発地域、感染経路、症例の年齢分布、診断法、予後などに関する情報を集計した。動物由来感染症のいくつかは感染症4類疾患に指定されて届出が義務づけられている。4類疾患に指定された動物由来感染症に関しては、その発生状況を文献調査よりも、現状に即して把握できるが、バルトネラ症やパスツレラ症など4類疾患に指定されていない動物由来感染症に関しては、発生件数の把握はごく一部になるものの、データベースを利用した文献検索の手法によって調査する以外に方法がないため、今後も文献検索による調査を継続する必要がある。

E. 結論

文献のデータベースを利用して動物由来感染症の発生動向を知るという手法には、欠陥はあるものの、通常の発生動向調査では得られない情報、つまり感染経路、診断法などに関する情報も入手することが可能であり、こうした情報を集積・分析することにより国内における動物由来感染症の実

態を明らかにするとともに、さらには動物由来感染症の診断を容易にする手段を提供できる。

G. 研究発表
未発表

F. 健康危険情報
特記すべきものなし。

H. 知的財産権の出願・登録状況
予定なし。

表 1. 三次調査で検出された疾患別文献数

疾患名	件数	例数	疾患名	件数	例数
クリプトコックス症	58	68	リステリア症	9	9
バルネラ症	38	47	オウム病	8	10
つつが虫病	26	31	レプトスピラ症	7	12
パストレラ症	22	24	トキソプラズマ	7	8
E型肝炎	21	23	ライム病	5	5
トキカラ症	15	20	日本脳炎	3	3
エルニア症	15	18	肝蛭	3	3
エキノコックス症	13	20	ジアルジア	2	2
糞線虫症	11	11	野兔病	1	1
Q熱	10	15	類丹毒	1	1
日本紅斑熱	9	12	合計	284	343

表 2. つつが虫病の年別論文数
及び症例数

年	論文数	症例数
2004	4	4
2005	6	9
2006	9	9
2007	7	9
合計	26	31

表 3. つつが虫病症例の男女別年齢分布

年齢	男子	女子	症例数
0-4y	0	0	0
5-9y	0	1	1
10-19y	3	0	3
20-29y	0	0	0
30-39y	0	1	1
40-49y	2	1	3
50-59y	3	6	9
60-69y	5	2	7
70-79y	4	2	6
80y-	1	0	1
合計	18	13	31

表4. つつが虫病症例の主訴，主要症状，発生地

主訴	例数	主要症状	例数	発生地	例数
発熱	25	皮疹・紅斑	21	福島県	3
皮疹・紅斑	19	痂皮	15	長崎県	3
倦怠感	7	発熱	11	長野県	3
頭痛	5	リンパ節腫脹	8	埼玉県	2
咽頭痛	4	刺し口	6	岡山県	2
食欲不振	3	結膜充血	4	石川県	2
関節痛	3	喉頭蓋腫脹	2	静岡県	2
痂皮	2	全身倦怠感	1	鹿児島県	2
リンパ節腫脹	2	肝機能障害	1	三重県	1
嘔気	1	季肋部痛	1	山形県	1
呼吸困難	1	腎機能障害	1	山梨県	1
筋肉痛	1	意識障害	1	岩手県	1
めまい	1	項部硬直	1	広島県	1
ふらつき	1	扁桃腫脹	1	東京都	1
季肋部痛	1	黄疸	1	熊本県	1
合計	66	合計	68	群馬県	1
				青森県	1
				鳥取県	1
				北九州	1
				記載なし	1
				合計	31

表5. つつが虫病症例における検査，合併症，感染機会

検査法	例数	合併症	例数	感染機会	例数
抗体検査	31	DIC	3	山菜取り	4
IgM,IgG 抗体	19	肺炎	3	山に用事	5
IF 法	5	ショック	1	自宅が山際	3
Peroxidase 法	3	胆嚢炎	1	草むらに入る	3
PCR	5	喉頭蓋炎	1	畑作業	1
Weil-Felix 反応	4	腎不全	1	植木	1
				農業	5
				酪農	1

表 6. パスツレラ症の年別論文数
及び症例数

年	論文数	症例数
2004	6	7
2005	4	4
2006	3	4
2007	9	9
合計	22	24

表 7. パスツレラ症症例の男女別年齢分布

年齢	男子	女子	症例数
0-4y	0	0	0
5-9y	0	0	0
10-19y	0	1	1
20-29y	1	1	2
30-39y	1	2	3
40-49y	2	1	3
50-59y	1	7	8
60-69y	1	1	2
70-79y	1	2	3
80y-	0	2	2
合計	7	17	24

表 8. パスツレラ症の主訴，主要症状，実施された検査

主訴	例数	主要症状	例数	検査法	例数
発赤腫脹	14	発赤腫脹	15	膿培養	15
疼痛	10	排膿	7	血液培養	4
発熱	9	発熱	5	喀痰培養	3
意識障害	3	意識障害	4	皮膚生検	3
食欲不振	2	膿ほう	3	髄液培養	1
嘔吐	2	肺ラ音	2	組織片培養	1
皮疹	2	項部硬直	1	気管支鏡	1
肺腫瘍精査	1	肺内腫瘍	1		
火傷	1	全身倦怠感	1		

表 9. パスツレラ症症例の診断, 予後, 感染源, 発生地

診断	例数	予後	例数	発生地	例数
蜂窩織炎	13	回復	22	愛知県	6
敗血症	4	後遺症	2	大阪府	3
肺炎	3	死亡	0	高知県	3
膿疱	2			北海道	2
DIC	2			東京都	1
肺膿瘍	1			兵庫県	1
髄膜炎	1			千葉県	1
化膿性脊椎炎	1			埼玉県	1
骨髄炎	1			山口県	1
副鼻腔炎	1			沖縄県	1
化膿性腱鞘炎	1			神奈川県	1
				福岡県	1
				群馬県	1
				鹿児島県	1
				合計	24

表 10. トキソカラ症の年別論文数
及び症例数

年	論文数	症例数
2004	7	7
2005	2	2
2006	5	10
2007	1	1
合計	15	20

表 11. トキソカラ症症例の男女別年齢分布

年齢	男子	女子	症例数
0-4y	1	0	1
5-9y	0	1	1
10-19y	0	1	1
20-29y	2	2	4
30-39y	1	1	2
40-49y	2	1	3
50-59y	6	0	6
60-69y	1	0	1
70-79y	1	0	1
80y-	0	0	0
合計	14	6	20

表 12. トキソカラ症症例の主訴，主要症状，発生地

主訴	例数	主要症状	例数	発生地	例数
視力低下	11	眼底異常	9	岐阜県	7
霧視	3	硝子体異常	6	大阪府	3
眼充血	1	網膜剥離	3	東京都	2
飛蚊症	1	ぶどう膜炎	3	愛知県	1
視野欠損	1	発熱	2	大分県	1
硝子体出血	1	全身倦怠感	1	福岡県	1
眼充血	1	四肢麻痺	1	長崎県	1
発熱	2	温痛覚障害	1	愛媛県	1
下痢	2	肝腫	1	青森県	1
咳嗽	1	関節痛	1	千葉県	1
全身倦怠感	1	白内障	1	神奈川県	1
感冒様症状	1			合計	20
上腹部痛	1				
手指しびれ	1				

表 13. トキカラ症症例の検査，治療，感染源

検査法	例数	薬剤，処置	例数	感染源	例数
ELISA 抗体	13	アルベンダゾール	5	イヌ	6
トキカラ抗体	5	チアベンダゾール	1	ネコ	3
胸部 CT	1	ジエチルカルバマジン	1	牛レバ刺し	4
腹部 CT	3	プレトニゾロン	8	牛生食	2
腹部エコー	1	トリアミノロン	3	特になし	3
脊髄 MRI	1	硝子体手術	5	記載なし	5
		光凝固	1		
		記載なし	1		

表 14. エルシニア症の年別
論文数及び症例数

年	論文数	症例数
2004	4	4
2005	6	6
2006	0	0
2007	5	8
合計	15	18

表 15. エルシニア症症例の男女別年齢分布

年齢	男子	女子	症例数
0-4y	2	1	3
5-9y	2	1	3
10-19y	0	3	3
20-29y	0	0	0
30-39y	0	0	0
40-49y	0	1	1
50-59y	1	2	3
60-69y	1	3	4
70-79y	1	0	1
80y-	0	0	0
合計	7	11	18

2005 : 42 例の食中毒報告 1 件

表 16. エルシニア症症例の主訴, 主要症状, 検査

主訴	例数
発熱	11
腹痛	8
下痢	7
嘔吐	4
頭痛	3
発疹	3
倦怠感	1
血圧低下	1
心窩部痛	1
関節痛	1
腹部膨満感	1
胸部腫瘤陰影	1
合計	42

主要症状	例数
発熱	5
下痢	4
右下腹部痛	3
皮疹	3
咽頭発赤	2
腹部圧痛	2
ショック	1
右下腹腫瘍	1
心か部痛	1
胸部浸潤影	1
腹部膨満	1
莓舌	1
腸重積	1
腸触知	1
興奮不穏	1
腎不全	1

検査法	例数
便培養	8
生検培養	4
咽頭培養	2
血液培養	1
不明培養	1
腹部 CT	5
大腸内視鏡	4
注腸造影	3
溶連菌抗原	2
開腹手術	1
胃内視鏡	1
エルシニア抗体	1
PCR	1

表 17. エルシニア症の感染源，起因菌，予後，発生地

感染源	例数	予後	例数	発生地	例数
わき水	3	治癒	17	山形県	3
井戸水	2	死亡	1	神奈川県	3
ブタもつ	2	記載なし	0	大阪府	2
輸血	1			岡山県	2
不明	2			長崎県	2
記載なし	8			兵庫県	1
				秋田県	1
				島根県	1
				新潟県	1
				石川県	1
				静岡県	1

Y. pseudotuberculosis	5
Y. enterocolitica	10
培養陰性	1
菌分離せず	2

表 18. エキノコックス症の年別
論文数及び症例数

年	論文数	症例数
2004	6	13
2005	2	2
2006	3	3
2007	2	2
合計	13	20

表 19. エキノコックス症症例の男女別年齢分布

年齢	男子	女子	症例数
0-4y	0	0	0
5-9y	0	0	0
10-19y	1	0	1
20-29y	0	0	0
30-39y	0	1	1
40-49y	1	4	5
50-59y	0	2	2
60-69y	1	3	4
70-79y	3	4	7
80y-	0	0	0
合計	6	14	20

表 20. エキノコックス症症例の主訴，主要症状，検査，感染機会，発生地

主訴	例数	主要症状	例数	感染機会	例数
腫瘍精査	7	理学的異常なし	12	酪農業	3
背部鈍痛	2	肝腫大	5	漁業	1
発熱	1	黄疸	1	左官	1
黄疸	1	下肢浮腫	1	清掃員	1
肝機能障害	1	上腹部圧痛	1	井戸水	2
胆汁嘔吐	1	骨軟部腫瘍	1	わき水	1
右腹部痛	1	合計	21	シカ生肉	1
右季肋部痛	1				
下肢浮腫	1	検査法	例数	発生地	例数
全身搔痒感	1	抗体検査	18	北海道	17
易疲労感	1	ELISA 法	10	東京都	1
記載なし	5	Western Blot 法	8	青森県	1
		骨腫瘍生検	1	群馬県	1
		肝生検	1		

表 21. Q 熱症例の年別論文数
及び症例数

年	論文数	症例数
2004	3	6
2005	3	7
2006	1	1
2007	2	3
合計	9	17

表 22. Q 熱症例の男女別年齢分布

年齢	男子	女子	症例数
0-4y	2	1	3
5-9y	0	0	0
10-19y	0	0	0
20-29y	0	0	0
30-39y	1	2	3
40-49y	0	1	1
50-59y	2	0	2
60-69y	0	0	0
70-79y	3	4	7
80y-	1	0	1
合計	9	8	17

表 23. Q熱症例の主訴, 主要症状, 検査, 発生地

主訴	例数	主要症状	例数	検査法	例数
発熱	10	発熱	10	IgM,IgG 抗体	11
咳嗽	5	咳嗽	4	抗体検査	2
呼吸困難	3	肝機能障害	4	肝生検	1
痰	3	肺炎	3	胸部 CT	7
頭痛	2	呼吸困難	2	腹部 CT	1
咽頭痛	1	頭痛	2	記載なし	4
全身痛	1	全身倦怠感	1		
全身倦怠感	1	食欲不振	1		
食欲不振	1	胸水	1		
肝機能障害	1	咽頭痛	1		
肺炎	1	全身痛	1		
記載なし	4	血小板減少	1		
		記載なし	3		

発生地	例数
宮城県	8
北海道	4
愛知県	2
奈良県	1
福島県	1
岐阜県	1

表 24. 日本紅斑熱症例の年別
論文数及び症例数

年	論文数	症例数
2004	0	0
2005	4	6
2006	3	4
2007	2	2
合計	9	12

表 25. 日本紅斑熱症例の男女別年齢分布

年齢	男子	女子	症例数
0-4y	0	0	0
5-9y	0	0	0
10-19y	1	0	1
20-29y	0	0	0
30-39y	0	0	0
40-49y	0	0	0
50-59y	2	3	5
60-69y	2	1	3
70-79y	0	2	2
80y-	0	1	1
合計	5	7	12

表 26. 日本紅斑熱症例の主訴，主要症状，発生地，感染機会

主訴	例数	主要症状	例数	発生地	例数
発熱	11	発疹・紅斑	11	長崎県	1
発疹・紅斑	11	発熱	10	徳島県	2
倦怠感	3	全身倦怠感	3	島根県	3
関節痛	2	血小板減少	3	鹿児島県	2
嘔吐	1	関節痛	2	愛媛県	1
下肢脱力	1	歩行障害	1	和歌山県	2
意識障害	1	食欲不振	1	福井県	1
筋肉痛	1	歩行障害	1	合計	12
		筋肉痛	1		
		意識障害	1		

検査法	例数	感染機会	例数
抗体検査	12	キャンプ地	2
CT	2	草刈り	1
超音波	1	野山	2
		記載なし	7

表 27. リステリア症症例の年別論文数及び症例数

年	論文数	症例数
2004	4	4
2005	1	1
2006	2	2
2007	2	2
合計	9	9

表 28. リステリア症症例の男女別年齢分布

年齢	男子	女子	症例数
0-4y	3	0	3
5-9y	0	0	0
10-19y	0	0	0
20-29y	0	0	0
30-39y	0	1	1
40-49y	0	0	0
50-59y	0	0	0
60-69y	0	1	1
70-79y	4	0	4
80y-	0	0	0
合計	7	2	9

表 29. リステリア症症例の主訴，主要症状，検査

主訴	例数	主要症状	例数	検査法	例数
発熱	7	発熱	4	細菌培養	7
下痢	2	項部硬直	2	髄液培養	4
痙攣	2	意識障害	2	血液培養	3
胸部不快感	2	呼吸不全	1	血栓培養	1
意識障害	1	起座呼吸	1	咽頭培養	1
胸痛	1	痙攣重積	1	摘出弁培養	1
起座呼吸	1	多呼吸	1	頭部 CT	3
項部硬直	1	頻脈	1	胸部 CT	2
頭痛	1	咳嗽	1	心エコー	2
		浮腫	1	心カテーテル	1
		胸部大動脈	1		

表 30. リステリア症症例の診断，予後

診断	例数	予後	例数
化膿性髄膜炎	4	治癒	7
髄膜脳炎	1	死亡	2
感染性心内膜炎	2	記載なし	0
菌血症	1		
リステリア症	1		

表 31. オウム病症例の論文数
及び症例数

年	論文数	症例数
2004	3	4
2005	2	2
2006	1	1
2007	2	3
合計	8	10

表 32. オウム病症例の男女別年齢分布

年齢	男子	女子	症例数
0-4y	0	0	0
5-9y	0	0	0
10-19y	0	0	0
20-29y	1	0	1
30-39y	0	0	0
40-49y	0	1	1
50-59y	3	2	5
60-69y	1	1	2
70-79y	0	1	1
80y-	0	0	0
合計	5	5	10

表 33. オウム病症例の主訴，主要症状，発生地

主訴	例数	主要症状	例数	発生地	例数
発熱	6	発熱	7	大阪府	3
呼吸困難	5	咳嗽	4	長野県	2
咳嗽	2	呼吸困難	3	大分県	1
食欲不振	1	全身倦怠感	3	静岡県	1
意識障害	1	チアノーゼ [△]	1	東京都	1
ショック	1	頭痛	1	京都府	1
合計	16	食欲不振	1	福島県	1
		意識障害	1	合計	10
		ショック	1		
		合計	22		

表 34. オウム病症例の検査，感染源，予後

検査法	例数	感染源	例数	予後	例数
胸 X-P	10	インコ*	7	回復・改善	8
胸 CT	8	ペット鳥**	1	死亡	1
抗体検査	10	飼育歴なし	1	記載なし	1
FA 抗体	5	不明	2		
CF 抗体	5				

*インコ死亡 4，インコ元気 2

**宅配業者荷物の鳥から

表 35. ライム病症例の年別論文数
及び症例数

年	論文数	症例数
2004	2	2
2005	2	2
2006	0	0
2007	1	1
合計	5	5

表 36. ライム病症例の男女別年齢分布

年齢	男子	女子	症例数
0-4y	0	0	0
5-9y	0	0	0
10-19y	0	0	0
20-29y	0	0	0
30-39y	1	0	1
40-49y	2	1	3
50-59y	0	0	0
60-69y	0	1	1
70-79y	0	0	0
80y-	0	0	0
合計	3	2	5

表 37. ライム病症例の主訴，主要症状，検査，病原体，発生地

主訴	例数	主要症状	例数	検査法	例数
紅斑	3	紅斑	5	ELISA 抗体	2
皮疹	2	腫脹	1	Western Blot	2
痒み	1	硬結	1	生検	3
		関節痛	1	培養	1
		咬刺痕	1	PCR	1

病原体	例数
Borrelia garini	2
Borrelia afzelii	1
同定できず	2

発生地	例数
北海道	4
岐阜県	1

表 38. 糞線虫症症例の年別論文数及び症例数

年	論文数	症例数
2004	3	3
2005	3	3
2006	4	4
2007	1	1
合計	11	11

2006：他に輸入例 1 例

表 39. 糞線虫症の男女別年齢分布

年齢	男子	女子	症例数
0-4y	0	0	0
5-9y	0	0	0
10-19y	0	0	0
20-29y	0	0	0
30-39y	0	0	0
40-49y	1	0	1
50-59y	4	3	7
60-69y	1	0	1
70-79y	1	0	1
80y-	0	1	1
合計	7	4	11